国花
万宝

日本居家秘用

四

目録 四

種植（うゑうゑ）
草木のうゑかへつぎ木の法 変花をつくり并に云々 せう出付ざる法虫を去る法

香（かう）
香のたくしやう香ろの灰の用 せう洗香きやらの見きゝ 仕やう其外香の名もあれ 調合あるふんりやう委く記

花（はな）
花の仕やう同たてかへやう そぞそせうすべて花をあへ まるくろうえをくすりれ

硯墨筆（すゞりすみふで）
すゞり墨筆の聞ひやう硯 そめ用ひやう紙よろうく 物のかきやう唐紙の目利 朱印肉のあはせやう等委

染物（そめもの）
縮布友禅染やう染色 の厚きやう灰汁の用ひやう 其一切染物のことを委く記

雑門（ざうもん）
諸科の名法諸事の法 遠路を行附る人の名法 うりあるところまかしく記を

ヲ 8
3370
4

日本居家秘用巻七目録

○種植

此部ハ樹木乃植やう接木乃法草花さし物乃まもりやう水菓乃そへやう草木に出る虫乃はらひやう法方まで記しぬ

○香

此部ハ香乃たきやう香炉乃灰乃用ひやう沈香伽羅乃目利乃しやう銘へやう焼物乃方線香の法香道具の図式まで

門 ヲ 8
號 3370
巻 4
昭和十六年四月八日購求

識しるべし

○花

此部ハ花乃切やうたくハへやうそゝぎやうまでを
花瓶愛まてのこゝろへ識
しるべし

○種植

▲およそ果実ハ全く熟せざる
時に取べし十分熟し
てとれバ来年盛ならず 居家必備

▲およそ果実の樹ハつねに肉汁(?)
を根接ぐ時にうかひて根ニかゝる(?)
しるしまたハその根に類
せし 同上

▲梨ハ冬月枝毎にたはめて
常に解ざれバよく実をむすぶ

▲一切の草木の虫百部根を
煎て灌きかくれバ皆死ス
▲甜瓜の種をおろさんとせバまづ
一日酒糠或ハ白粉の内にて
水に浸し瓜の皮より出の水に
浸し一宿して土中へまけ
バ美味に生ス
▲草麻子を植られ居宅の
塵も毛虫集る邊に植べし
よく盛なり
▲茄子ハ本四五寸を以て毎日

茄子七八分を取摘やうあり
その法ハ毎年九月に先よき
地を廣さ三尺四方深さ三尺
にほりてその内へ糞を一まい
いれて十一月十二月の比にいたり
其て糞乾きて半分ほどに
なりたる時溝の泥を糞の
うへにほど入正月にいたり
て又半分ほどになる時園圃
の好土を又多くそのうへに置
たし四五月を経てその糞

土ハ是をかりし下へまきかゐし
夜出して地にふひろげ曝
乾をかし十日ばかりして
又別乃好土をとりあハせよく
おの器へいれ埋ミ地を平均ふ
らしめ置二月彼岸乃時ふ
其の糞土を耕し核を下し
それ苗五六寸ばかりになりた
頃とそれの中よりてよくとり
それを五本接ほどしおきて
好接ぜざるやうにすべしその

余乃苗ハ遠く移さりて他
圃ふ植べし五本の苗一ツふ
すぐろころ早朝日出るおふ
よれ硫黄乃末を紙綿ふて
苗のよふかくかくべし虫を去
さめなり
▲桑ハ構につぐハ又桑乃実大
ならと草細同ふ見えるう
▲桃乃木ふ李の枝ハ接ぎけれ
紅ふして美し李の木ふ桃の
枝ハ接ぎハ桃李となる

▲蕪菁子を蒔時に熱き湯に浸し湯のさめるまで置日に干してまけバ虫くハず

▲樹木を接には南に向ひて下にある枝を接バ実をむすぶ事多し

▲およそ花果乃木には麝香の余乃諸香乃気をいむ是をさるには蒜韮をうゆべし

▲蜜柑乃木乃根に鼠ヲ埋めバ

▲胡桃乃枝を柳の真中に接バはれやすくして実のりよし

▲柿乃木に桃の枝を接バ金桃となる

▲諸木俄に枯んとするには急に地上三寸陽に向ふ所に灸をすゆべしおほくハいくる

▲正月中旬に木樨。桜。桃。黄薔薇をさすべし　正月下旬に桃梅杏李臘梅梨棗

梂栗楊柳紫薔薇を接べし二月上旬に橙橘を接ぐべし右乃花菓に十二月乃間に糞穢をそゝげば来にいたりて花果自然に盛なり

▲杏根を浅し大なる石を根に重ねおきしきれば花盛に果を結ぶによろし人家に多くうゝるの盛なり

▲薤秧　性宜湿をおそるゝ

月は葉をそはぐ四月新葉を生ずる時旧葉をかりとるべし湿にあてれば朽腐急に朽る事をまつりたるべし根をなすれもよくいたる其のなりて根れんとせり時は鉄屑をこゝへと其又月根の外さりて一尺をり溝をなり鮮魚乃洗汁あらひへ糞汁をそゝぐべし古法に汁おおハ今はなくらひに

▲茉莉花は麝香を畏る

是によりては一蔕も収めがたし
▲柿の木年によりては正月
小六たる錐にて木の皮を鑽
節あるこゝをあけば実の落こ
とおほしといへり
▲文様の木もたれ木すれは灰
汁の根にそゝぐべし堊
泥味なし
▲竹の気うすきには根に死猫を
埋めてよし
▲蓮の花うしなふは一池の中に

秋種ふる植からしめて大きに
をうけ名に更ては蓮は糞溺
性賦をいむ古瓦石をこ
急ときゐへしと我ひかり入え
冬り
▲秋によそ水果ないかしらは牛の
糞を用ゆべし大に桐油を
いむとし池中飛鑵の木に
いまはは水果ほそくなる
▲山に危うきを択て茶に
用ゆべし黒に挿ては深笑

に用なし是にハ用なかりし

○香

▲名香つゝむ紙ハ唐紙を用ゆべし鳥子紙にはつゝむべからず鳥子紙につゝむときハ小紙香ハ損ずるなり常にハたとう紙にいれて置べし

▲香炉の灰ハ池の泥をよくねり清き土を紙に干して焼たる灰を用ゆれバ火久しくもつなり

▲火とりの沈香ハそと大ふうのごし又香ハ上包に杉原紙

を用ゆべしかくすれバ香炉の
きえず有て又香炉の火はよ
くもゆるハ少揺れ方ニ香銭
出すべし
▲火あひたさんの為に指紋あ
ばかりに熱くして指紙多く
ほど有る紙ずしともしまても
このほか多くのほと有るは
よし又香銭は二三分時になる
額に不の火気のあうる
ほどよくなるがよし

▲野掛などハ伽羅紙をくに
香炉なき時は火縄を五六
分ほど紀伽羅紙のすみへ
ふたゝび火口に火点すれ
バ次第に伽羅へ火うつり
竹火縄に多くすぐるをよし
▲伽羅の香をきく時は精気ハ
香炉の下へ竹の引手粉多く
つよくたく時はすぐによく五
そうと十ぶんに減
▲伽羅ハ紙火にしくたき法

黒砂糖を水ふて拵り竹の
皮を入よく煎じその煎
じその竹乃皮ふて伽羅を
よく包みて壺ふ入蓋をして
土ふ埋め幾年を経ても口を
ひらかざれ

▲造線香法　楡乃皮乃糊
ふ海苔雑を加へ香末を和し
てはらかふし香ハ好みふ志
たがふべし

▲伽羅を衣服ふとめさせば

空ふ放ちてしばらく湯を沸しかせてふ
かけ間おく八襟又ハ袖を湿し
てその手拭ふてしぼりてと
むべしよくとぬる

▲沈香　秘密ふして水ふしづ
むを上とす交趾乃産
黄ひしたへてきしむを上とす
暹羅乃産ハ色鶏乃毛ふ似
て香よくよの沈なり太泥
乃産ハ本理稠遠り茶色
美なるまでしろの香よろし

は古城乃産ハ白黒同じかり
鶉乃斑ふ似たる香よろしく
又近年中華乃舡よりもあり
一書ふ曰唐船長崎へ伽羅を
渡すハ皆壺ふ水を入て伽羅
を浸して持来る是我日本
人水より揚て乾れバ伽羅
水ふ浸さゞれハ香氣なきなれ
也ふ日本まても水ふ漬て
来るなり然ハな草
ふいへ添沈水香ふ雑ひなれ

されあり沈香ハ水ふ浸され
してその中櫃ふ入て渡すも
香氣もなきふ於ともありこ
またハ本草乃蜜香なるべし

▲薫物乃方

たそうれ

一 沈香 四両　藿香 一匁
　 甲香 二匁　白旦 一匁

右ふるまは沈乃焼がら紙入
白蜜おしく湯煎して練り
あいれ

山路乃方

一沉香四両　丁子二両　薫陸一両

白且一両　麝香一分　甲香一両

梅花乃方

一沉香五両　丁子三両　甲香二両二分

白且一両　甘松二分　藿香一分二朱

薫陸三分三朱　生木香二分　麝香三分二朱

龍脳三朱

▲薫物練合やう蜜練様の

事は黒ねりに蜜練本分入水を

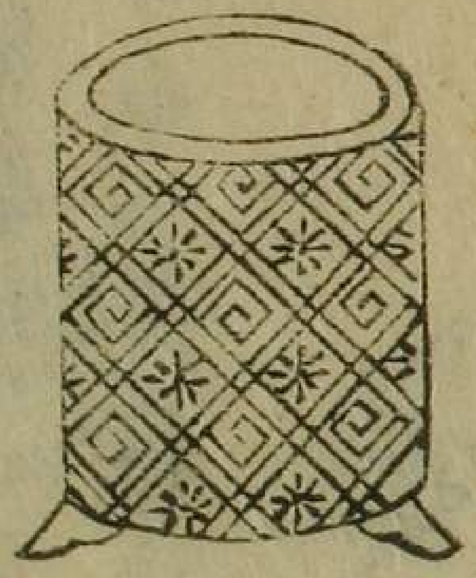
黒ねりに七分になりほと入塩を

よくよく加減にあはせをとられ

五分になりほどに練るべし

香道具之圖

香炉



香炉乃形いろいろあり其の好に

まへのふあるし或ハ丸又ハ角又は

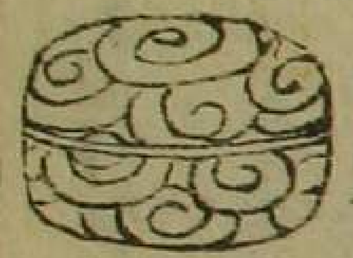
三角又ハ菱形六角八角地紋

その形さまざまなり人々このむ

圖ハ香炉筥へ入添香炉なり

書院香炉ハ各別なり

香筥

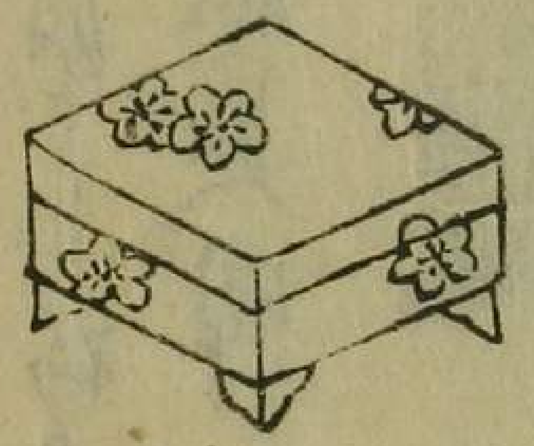


香筥乃形ハさま〴〵あり塗
やうもいろ〳〵あり或ハつゐ紅
或ハつゐ朱五色象金銀かな
かひ蒔絵うの数多なり

重香筥

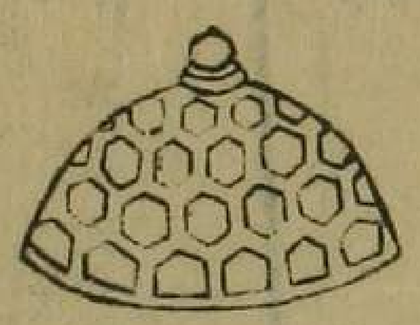
是は重香筥といふ下ハ焼から
入なり中ハ伽羅入上は合香
なり

焼がら入



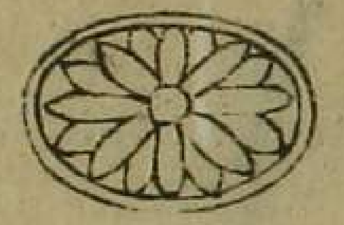
是も形と絵やうさま〴〵あり

透蓋



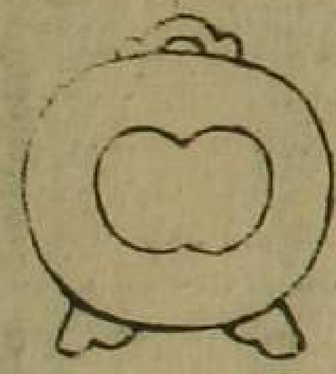
銅乃細目
多くハあるを
手取し

打敷



是もいろ〳〵
ありふくさ
紫ホ十條
いろ〳〵あり

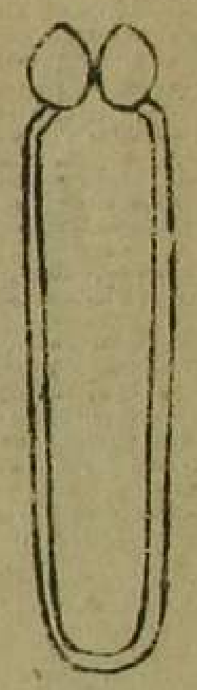
火取



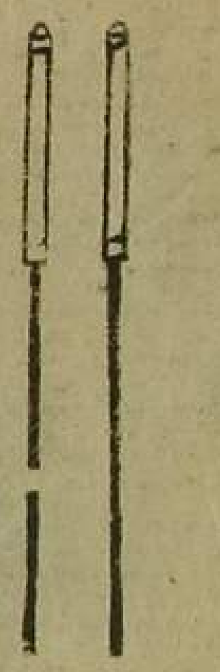
灰押

香匕いろ〳〵あり或ハ地紙形又ハ短冊形又ハ色紙形などあり

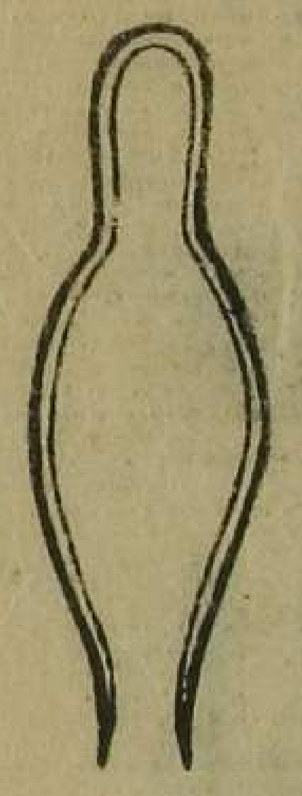
香匕



火箸



火擧

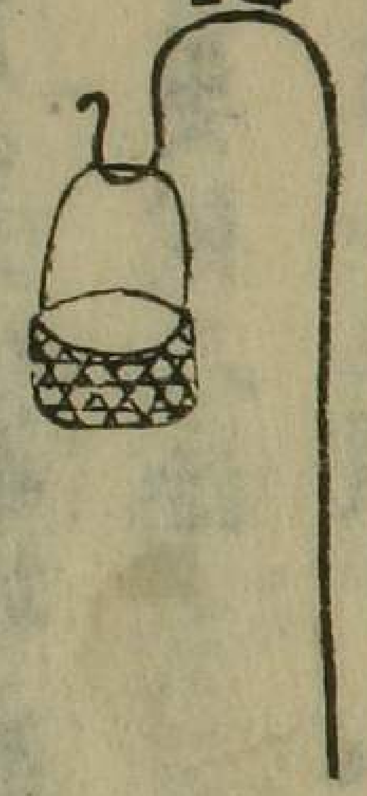


さらえ

桯

はじより先七分あるべし

衛士籠



▲香炉台乃大小ハ好にまかすべし
盖とやらう盖もさせ火さし
或ハさん盖ふともあるべし 絵
やうとまあくなり梨地蒔絵
青貝砂粉ぬふ頃よろし

或ハ香盆(かうぼん)ハかけごのごとく
こてのとあり

▲沈箱(ぢんばこ)ハ大小ハ好(このみ)に随(したが)ふべし
大かたハ香炉箱乃寸法べし
是ハかけごに香合(かうがふ)紙六ツ入
かけごよりしたへハ香炉香包も
外ニ道具紙入添

▲香盆(かうぼん)とす法定(こぢやう)いれ絵をやう
ことにいろいろあるべし

▲香箸(かうばし)ハいろいろあまたあれども
高麗(かうらい)箸(はし)を用ゆべし

○花

▲花(はな)ハ目をよろこばしめむ生
意ありやしき家に好(この)み瓶(ひん)に
さし蘭(らん)蒲(か)に挿(さし)て常にあそぶと
よろしきとて老父(らうふ)雲霞(うんか)あ
古人ハ天気(てんき)和暖(わだん)乃時ハ花(くわ)
壇(だん)にいでゝむかふてせうようせり
去ひ射紙鶏(きう)然れバ喜(きう)生(しやう)
乃睦(たとけ)ととなりかまうせ発(せいてつ)
乃時紙まのを楽(たのしみ)にすべし

▲たしきまれ花紙 揺(うる)の小花

乃多かんことはれといで秋花
ところ肥土は少く根まはりは
細石しきふいれて花おほ
く自然ふ盛なり　居家必備

▲冬月瓶中乃水凍りては破損
をおそれ瓶中ふ塩をまし又硫黄
を入置べし　同上

▲海棠乃花は薄荷水をれ
是は浸せハ開く　同上

▲草花乃赤と白と一所ふ挿
置しは白ハ赤き盛なれは

▲草花は根ふ辣をつけれは下ふ
泥は底くあがりし水湿滞
すされはさゝへは或ハ底ふ荒砂
ふ石は入るべし

▲枝乃大きなる花は筒又は大
筒ふ生るには筒の中へ松ふて
とふ石ふてとれとり従合し
生ればされは花かさなりて生
られは

▲草花乃鉄は皆いひことれは
竹器ふて切るべし

▲花は面を方へむくる也葉
の葉は茎の向上下に乱れ
はひ花を動ぜぬやうにすべ
しかくれおくよくれバよく日紙
ふせぐ
▲およそ杜丹芍薬蓮花の類
瓶にさしたれ早晩に著色ら
らバ巳の時申の時にいろって
茎を燎しまはし鳥かられ
▲杜丹の花ハ茎は急に切
ぬしおかれいるへかし

▲蓮河骨沢瀉槙木の水草
の花は茎をまげ根紙系
にてくゝりの下紙切ばし水
紙にくゝへしく立用れ
▲萩の花は生るに酒紙お
かまれはよく水紙はぐる
▲水仙宿の葉八本紙ぬらし紙
にはさむらし文八竹の筒に入桐
の箱に入く紙にくもり風
の入ざるやうにしくかこへハ之
十月五十月をそこねば室

方へむかふかもしかくのごとくを
べし
▲室中の花ハ昼ハ床へ出し
夜ハ炉辺の近所に置べし
べし昼も室に長くしてハ
ほろびどもあらバ氷の御ぬか
どの下に置べし
▲暑気の時分ハ切く水揚
かへくよし若も方より
来りし花ハ猶もかれた
るハ冷水に入置ハいけ出る

そのなり
▲梅椿水仙ハ室へ入て引ろ
まろうはよほどふくれさた
ぞこあらでは開かざるものゆへ
▲花瓶に水ながさせずは其
あらバ瓶のうちに砂気をし
て水なはぐあしうちうる
ひれども水ながさ入てとさがさ
だいさばよくくしまへハ内
を揃ふはくろよし
▲草花ハさうさ海ふ持まの

花ハ墨にて川ハ雲中の事
なりさまど〱と見合行くべ
し杜若の額ハ書すべるは

日本居家秘用巻八

○硯墨筆

此部にハ硯墨筆乃あつかひ
やう硯水乃用ひやう紙ふうう
てとれ〱書やう唐紙乃用
紙乃表やう朱印肉乃あはせ
やうまた紙こゝろへ

○染色

此部にハ絹布もめん乃染
やうより色乃類角類乃染
やうあるひハ染色のぬきやう
灰汁乃用ひやう一切染物の
事ともハしるのせる

○雍門
此部にはあらゆる重宝の
事ども集めてしるす

○硯墨筆
▲硯箱の上に書画を書ば
湿気紙をとをして紙にしみ
のふに染て灰汁を除べし
て使ふさる文真綿あるひ
ハ竹ぬにて搨とし
▲墨に用る硯は切て洗ふべし
し墨の滞りをいやがるに
も搨りて後ハ膠の気あるか
ならず搨りて筆の滞る

細字を書には兎毫筆
むすびし毛麺或ハ紙にて拭
ひ去るハ毛紙墨に混じれ
ハ害あり
▲硯を洗ふにハ蓮肉のぬけ
がらを切りの小口にてよくり
洗ふべし滞る墨垢拭
れこしきり硯紙洗ふ也　洞天筆餘
▲毛邊紙ハ南京乃官紙試
みしにれよそ唐紙を試し
法ハ裕ふりて手に付ば紙
よしにハ潤滑にして厚く
多く墨がけにハ淡黄赤に
して鶏卵乃皮に似たる紙
を宣紙とハ俗に是紙かいふり
まとの宣紙白くして堅紙
紙下品とハ
▲硯箱乃中に常に番椒紙
二つ三つ程入置ば墨凍事
のなうしなし是法をしるべし
ふるしあり
▲臘梅樹皮を硯の水に浸

てふきまたは光彩あり

▲冬月乃硯の水ニ肉桂を碎き絹ニ包ミ浸し置て用ゆれバ厳寒ニも氷らず又丁子を用ゆるもよし

▲硯ハ紫石を用ゆべし肌濃にして潤ひありて夏も水乾かず青石ハ其次なり

○赤間関より紫石青石ともに硯ニ作り出す近頃人ハ青石を撰ぶといへども端渓の他所乃青石ハ是ニしかず

▲墨を擦には石面にしのとあてゝやゝ長く擦べしあまり強く力を入れバ墨さけやすく又あやまりありやゝあるも墨濃からずして紙に滲む考べし

▲墨乃善悪を試るには文字中字を紙に書くらべし細字にてハ善悪知がたし

▲唐紙には唐墨を用ゆべし

よしとも貴賤ありて
濃なる墨ハまれなり
▲地成しる紙ハ墨多く
淡くなりやすく書なし或
ハ胭脂青黛を墨に入へく
かうばし
▲墨淡則傷神彩太濃則
滞鋒鋩　書学提要
▲養硯　硯乃池ハ乾を忌へか
らし毎日水をかえて浣ふへし
ふへし墨ハ紙ハ彩る所ハ水を

たくはへおきて用ゆる時ハ乾
まゝなり久しく浸しおけは
墨を發せす　洞天研録
▲筆以十月正二月收者為佳
養筆以硫黄酒舒其毫　洞天筆録
▲筆毛ハ秋ハ九月取よりたる毛
ひとしきハ其一よしとし軸竹
を用ゆるハ切するよし但ふ
筆乃軸ハ蝋やよし斑竹
を用ゆへし
▲柔紙には強筆を用ひ強

紙または楽筆を用ひて強
弱相かなふべし
▲唐紙に大字をかきて文字
やぶれたるは裏より類紙を以
はくろひ墨を以文字を補ふ
べし
▲朱印肉　白鳥のむく毛を
肉とするを良方とす又艾
をよくとりて寒中の清水
にて曝し日に干し又とりて
水にて真白にして朱と

蓖麻子の油を入て交合せ
但朱は石の榴木までよろ
艾は紙さらして用ゆべし底に
まづとる紙これなり
○又黄蝋　辰砂　胭脂なとを
加へるもよし
○一方に竹の上皮をけずりて
あまえを紙に力をこめて揉く
けずりたる油じ薄くこ海
うふとりて用ゆ

○染色

▲とんぼう染　先藍にて下地を染うのち楊梅皮十斤を
紙水二斗入て一斗に煎じ
二番に水二斗入九升に煎じ
右乃汁にて三四度そめてを
よく干酢五升に鉄屑五合
或ハ古釘乃類紙入て煎じに
へらして能さまし夏ハ三日
冬ハ四五日ほど置て紙に
一返んそめて又楊梅皮乃汁

へはけ二三四度そめるかくれ
ざらそめてかわかし又三四度
して好ほどに染かはかし衣の
表貝は絹八丈紬八ニ端乃
染汁なり此法は染家に
秘法あり但染家には
松ほど下染紙せざる田へ地を
よりて一夜半乃時は赤にいで
色河しをなる下染紙よく
ちるほど色かわらずして地
はよし

▲文法下地紙藍にてそめう
乃上紙五倍子石榴皮を煎
しる紙のはけ文様れ汁にひ
たし一宿して其紙乾かし
此法地紙換ぜん
▲うこん染 うこん乃粉紙絹
一反には八両ほど水へいれ茶
碗に酢をすこしほど入そめる
但二時そうりはけ起るが
よし色かわらば湯にて染る
▲鼠色染 五倍子乃末紙やれ

炭としよくとりて水にて
の色をあひ好み次第にころ
にて染かへし但酢にてさらし
染ますはほやありていろを
よし

▲桑乃皮を煎じて褐色に
そむれば久しく落ず
○いちの木乃皮を煎じて染めば
久しく落ず

▲ぢん鼠染 下地を紫
小染てそのうへを梅末乃汁

にて二三返そめ鉄漿に五倍
子汁を加へてよし

▲桑染 桑乃木を煎じて
ふびくそめそれより楊梅
皮乃汁にて一返そめ椿乃
灰汁にてとむべし

▲また竹染 黄はだやえて
火になるかうすくひよくさまり
て大豆をこしらろの汁にて
あいせ石灰を加へ刷毛にて
ひき一へ染かし黒こかけた

それより墨汁を少し加ふべし
又阿仙薬并豆汁に入合せ
そめるもよし
▲かりやす汁染　右にしるせし汁染
のごとくうすくして染る
▲萌黄染　下地を空色ほどに
に藍にて染その上かりやす
の煎じ汁にて二返染その
上同じ汁に明礬を加へ
てそむる
▲柳茶　下地紙薄墨

黄にそめその上かりやすを
の煎じ汁にて一返そめその
上同じ汁に明礬を加へ
てそむる
▲黒茶　蘇木の煎じ汁
にて二返そめその上楊
梅皮の汁にて二返そめ又
蘇木の汁にて三返そめ樒
の灰汁にてとめ鉄漿をか
けるは緑礬をかくるもよし
▲蘇木染　よく紙すきうすく

煎じ蘇芳の明礬を合せ染へ
し染汁のさめざる内に染よ
此天気にかまはずよし若冷
さむる時ハ銅鍋或ハ土鍋にて
温め染るへし鉄鍋に入べき
入盆ハ多分し、鉄をいむ也

▲黄ちや　楊梅皮の煎じ汁
にて二返そめそのうへを椿
乃灰汁にてとむる

▲こめちや　同じ汁にて二返染
椿乃灰汁にべんがら少加へ

てとむる

▲かしちや　下地を蘇木乃汁
にて一返そめそのうへを楊梅
皮乃汁にて二返そめそのうへを
椿乃灰汁にてとむる

▲紅染　湯を桶へ入てとを
よきほどよくとりて紅をそゝぎ
そのあとへ酢を少し入おくべし
うりまの紙を盃に醋紙みるハへ
文志ばしく布を盃ハよく染る

▲灰汁　染家に藍紙制する

ハ辛灰なり是ハ蜆殻乃灰
をすこし加へて灰汁にされて
用ひきたれハ色あしく辛
灰ハ椿柞葉れ生枝乃灰之
○麻苧抔灌ふには綿実の灰
汁抔こともよし○布帛抔灌ふ
ハ稲藁乃灰汁を用ひ紫黒染
茜染すれハ椿乃灰汁をも加ふ
色ハ多変ずれ○早稲藁の
灰汁にて紅絹を洗へハ紅悪
く縦よし

◆染毛法　馬乃毛抔早稲藁
乃灰汁にてよく洗ひ米泔汁
に二日ほじはや昼夜水に
てよく洗ひ日にかわしてのそ
むべし染汁乃法ハ榛木昭
肥松十五匁臭木乃葉十枚入よ
く煎じ塩十五匁をくはへぬる
湯加減うして染ぐし熱れ
ハあし、但二日ほどは昼夜
取出し加減を見日にほし
三日ほどすゝぎて水にてさら

くと洗ふべし〇青色ふ染
るは緑青を酢ふてとくお
煎し底ふいつかざるやうふ
かき浸りしかさ伸して染べ
し牛乃毛をよくそゆる
▲藍乃手ふ付されは硫黄
乃煙ふて薫れバさる
▲茶乃染汁手ふ染付されハ
酢ふて洗ひ又梅酢ふて
洗ふとよし
▲木綿絹布とも染地ぬ湯

ふ浸しよくしぼりて染を
こじりをくして染やうしろ
め汁とかあまるほどふして
染ろし染汁かうまれ染
むら出来る
▲角類を染る法　焼礬ふて
紅花梅む紅乃酢ふてとく紅
紅を五ふ生塩硝五分入山炭
火ふかけ紅乃色へかつける
附象牙あるひハ鹿角馬骨
鯨の白骨乃類ふて染くり

よろ椰弁繻しゆ乃類を染
家ふ悪紅なり

▲唐紅染　蘇木百目　黄柏二両
松脂二両　右三色を一所ふ煎
じまぜ右を紅乃ごとく煎じ
あぐる

染やう八

一右乃茶煎じ汁四十目　かりやす十五
ずみ四十目　明礬三五
右一所ふあわせ水二升入よく
煎じいく度も染返して好

甑ふて蒸返し紅染乃ごとく
よくそゆる

▲渋染乃法　生渋一升ふ水
九升入たらひふてよく和合せ
生布ふても晒布ふても先
水ふて糊気をおとし右の
渋水へつけよくよく合せ棹
ふかけその下ふ渋水乃入たる
たらひを置て布をつたはら
せ干して幾度も渋水の
盡るまで染てよきなるし

湿気よりさむくなりてふるへ
気ふさがる

○雑門

▲旅中法　遠路を行時は
足に油をぬりて足をまめ
又洗足してのちはきて塩
を加へ足の裏にぬり火に
てあぶるべし
○又道をいそぎ行ときは
湯漬飯を食すれば命
ての中に害あり好しとも胸
腹いたむことありとい へ
り

又汁に加へて飯に湯漬
にして喰ふもよし
▲早天に山野に出る時生姜一
塊を口にふくめば霧露湿気
不正の邪氣にをかされず
▲大蒜を酒に浸し鼻の孔
にぬりてハ客中にて寒氣
を受ず又面部・手足に酒
塗してぬれバ邪氣にやぶ
られず
▲旅中宿々にては胃より

草鞋菅笠などの外手まで
夜具手拭のかし或ハ定
まりし宵にたくハぬき
バ明朝失ひあるしいつまと
大事の荷ハ座敷の中に忍ひ
ねまりしまくらもとにおくべし
▲人十月而生馬十二月而生狗
三月而生豕四月而生猿五月
而生禽鹿六月而生虎七月而
生虫八月化 博物志
▲金剛砂をもて衣服のんざけハ

石乃肌美あり

▲煙草(たばこ)貯(たくはへ)やうハ先厚(あつ)紙をもつて能く封じそのうへを渋紙あるひハ泥(こい)紙にて能く包みそれて桐の箱(はこ)又ハ焼(やき)物(もの)類又ハ酒樽(たる)乃中に入置べし

▲山漆よく金瘡(こんさう)の痛を治(ぢ)す

▲養(やしなふ)猫(ねこ)法 猫春秋(はるあき)二季(き)に子(こ)をうむ秋乃子は育よくそだちかねし性悪(わし)く おそろく

夜(よへ)ありおよそ六十日にして生る生れて一七日にして初めて眼(まなこ)を開く三旬(じゆん)を経(へ)て始(はじめ)て飯(めし)を食ふ一月半にて足(もじ)て猫(ねこ)乃おとさ十歳そうろう添時乳(ち)なきハよく米をかみてよくそそぐ汁○およそ病猫(びやうめう)は生鯖黄汁又鰍(ふしん)莫泥鰌(どぢやう)にまうくびするく治(ぢ)す又方胡椒(こしやう)の末(まつ)を水にて丸し用ゆ猫(ねこ)ハの草(くさ)を好ふ苦(くる)しめどもと甚だ

ろしあり但頭がしらく重て
引あぐるに脚乃爪がある
りんとのハ治せん又腰のね
けるハ尾乃根に灸へきれバ
眼ハ黒く○又猫が袖にて
飼ふとし蛤が焼く喰しむ
ましれにいでん

▲居雞法　雞ハさほハ長れ
おまし石ハおしく待つハ足し
さほおもくハ石が付ぬと
ましませさほまそれ茶く

じけて悪し先乃さゝげやうハ
わまそさほ八尺あまりハ六寸四
分さゞろあり一尺に六匁重さ
がりの法ゟりなりほかの傾
紙をとけかほふてさげてよし

▲草木乃生ハ皆月に應
ず月満まれは氣うる潤ひ
月虚まれは氣燥く志ゆ
此田へ水上強れ後下強淤
ハ竹木が代に上るしるしに
蟲やましし

▲小児の疳を治するには番椒を水に浸してその汁を口にそゝぐべし又蝦蟇を餌とするは即いゆる

▲金魚の死んとするは三ツ乃しぼり汁を口にそゝぎ入るは即いゆる

▲鶴の骨をん留に立れバ黒焼にして今脛の骨を用ゆ

▲宮中手足凍へざる法

古酒一升生姜六十目皮をさりよく細にし鍋に入て酒ゆるくたゝて半分ほどに煮つめて其汁を紙小豆粒ほど手足にぬりてよく寒氣をふせぎて凍へに

▲旅中食物なき飢ざる附

艾の生なるを食へバ飢をしのぐ又挽茶よく飢を凌く

▲頭風を去法　百部根茶花等分にまぜ合し竹筒に入根

はれ須ひ下に火はゝ盛なれ
ば衣服乃虱死して落る
又白鳥乃羽乃灰に水銀
を入下帯に結付れは虱こ
とごく死ます
◬牛乃虱は殺すは百部根
を煎じ洗ふ
◬當薬を煎じ小児乃衫衣
を浄れは虱蚤をさらる
◬およそ蛇乃類煙草乃脂
をいむ又胡椒よく蛇をふ
せぐ
◬荊芥よく蚊虫に通れ
◬油虫を去法　青蒿乃茎
葉を竈乃間に挿ておけは
たゆる
◬生蝋を晒す法　赤蝋にて
も青蝋にても鍋にてとけ
とろかし水乃中へうつし入
またとろくとなりて堅ま
るをいふてすくひ紅粉
ふへ入日向へ出し葉

帳にて水ぬれたるをかわかして干
乾しる時ハ又水にぬれたる紙を剥
度ごとにかくのごとくして干乾を
重ね三日ほどすれば元の
ごとくなり

▲書家に油の付たるハ先油を
ぬぐひとりて石灰をかけ置のけ
置べし

▲途中にて肌に風の通りてさ
むき時ハ紙を臍にあつべし
雲中の旅にハ胴紙を着用ゆべし

▲魚鳥を試る法　雁鴨をへて
鳥の古きと新しきを試るに穴
首の毛多く紫紙あげて
みるに赤きハ多けれバ新し
舌やわらかにて潤ひあるも
よし目のうちすき一同のくもり
するは古し魚はまづ首と
眼を見るべし新しきハ眼に
光あり鱗と潤ひ多く色の多
よく押てみるに身堅し○蛸
ハいぼおちて吸付ハよし抔で

里付ハかし
▲一西海潮界　大坂より備後
明石まで五十五里乃間潮上へ
さす○明石より周防のぞう
しまで四十三里乃間ハ是を
上へ満る○ぞうしより筑前の
山ろ乃御崎まで四十五里乃
間ハ下へ満る○山ろ乃御崎より
肥前乃かむ浦まで八十四里
乃間上へさす○長門ところつ
乃もかより北くとむろ見つる

●ぞうし乃潮を八九月ハ下へさす
さす